・必ず、『小野小町』2刷（古閑炯作者）からコピーして下さい。
・新しく文字を入力して、私にチェックさせないよう、お願いします。

第九十五章

小野小町

・『小野小町』は、13ポです。
・『新・やまと物語』第一巻に合わせ、13.5ポに変更お願いします。

5,381P

38

それは、小野良実が帰洛の勅命を蒙むった承和七年（八四〇）から数年後の承和十二年（八四五）末ごろのことであったろうか。それとも翌承和十三年（八四六）正月のことだったのだろうか。

小野良実は、「大和守」（大和国の長官）に任命された。『搨鳴暁筆抄』（写本・静嘉堂文庫蔵）に、何と、こう記されている。

「彼良実大和守になりて上洛し侍る時、近江国玉造庄にて独の小女に行逢り、則猶子（兄弟・親戚、または他人の子を養って自分の子とすること）とせり、小町といふこれなり」というのである。（「小野小町」前田善子、三省堂、一四六頁参照）

あるいは、

〈出羽国から、新しい任地「大和国」へ赴くために「上洛」してきた良実は、小野氏の本拠地「近江国」の玉造庄という所において一人の少女に行き逢った。この少女こそ、小町であった。良実は、自分の娘である小町を、あえて猶子として引き取った〉

といった意味なのかも知れない。

しかしそれにしても、良実は何故その少女「小町」を「猶子」（養子）としたのだろうか。

詳しくは分からないが、もしかしたら、次のような訳があったのではなかろうかと想像される。

衣通姫

先に述べた横山の麓にある『七国神社』のすぐ前には、清冽な水をたたえた『小野の泉水』と呼ばれる景勝の地があって、……六歌仙のひとりとして有名な小野小町はここで生まれたといい、この泉水の近くには、小町にまつわる伝承が数多く残されている。（「熊本の伝説」荒木精之、角川書店、七二頁。「小町伝説」明川忠夫、現代創造社、一三九～一四一頁参照）

小野良実は、流されるに当って妻と娘『備前』を近江国もしくは妻の実家に残し、この肥後国の小野の里へ降ってきたのであろうか。

なお、『謡曲拾葉抄』〈卒都婆小町〉の條に、

「小町が姉を備前といふ。古今集恋（歌五）の巻軸（巻物の終りの軸に近い所）の、

ながれては　妹背の山の　なかに落つる
吉野の川の　よしや世の中

〔とどのつまりは、（吉野川の両岸で向かい合っている）妹山と背山の間に、吉野川が割り込んでくるのだ。それで『よし』とするのか、世の男と女たちよ」

の歌、よみ人不知とあれ共、実は小町があね備前が歌なり。古今素純抄に見えたり」

とあり、――小町の姉の呼名を「備前」となしている。

しかし、小町の姉が果たして備前であったか否か、これだけの根據では、その眞偽を定めることは出来ないという。（「小野小町」前田善子、三省堂、一五八頁参照）

なるほど、小町の姉が『備前』であったかどうか詳らかでないが、

《そうでなかった》

とも言いきれないわけである。

この物語では、小町の姉を『備前』と呼ぶことにしよう。

＊

良実は、流されてきた横山の麓の村において、……父（筥）や母や、妻や幼子（備前）の安否を気遣った。

〈無事であろうか。私には、ただ、祈ることしか出来ない〉

讒者（あしざまに告げ口をする人）の為め罪を得、当小野ノ里に謫居（流され場所）を卜（うらない）し、配（島流し）在し、月を詠め、鴻雁（はくちょうや、かり）東に飛ぶ時は遥に帝顔を拝し、讒者の非義（義理にそむくこと）を憤

り、無量（はかり知れない程）の祈誓（神に対する誓い）を起し、七ヶ所の霊社を合せ祭った良実は、――あるいは、この七国神社の石段下の美しい泉水（小野泉水と呼ばれる）のほとりに佇んだことだろうか。

この小野泉水は、丁度、勾玉のような形（見方によっては九州のような形）をしていて、今、植木町指定文化財とされている。

＊

さて、そうした日々が続くうち、いつしか良実は、……美しい乙女に心をひかれるようになっていった。

その乙女は、全く確証のないことながらあえていえば、――『七国神社』の神主（阿蘇氏の近縁者か）の娘《巫女》であったかも知れない。

容姿（顔だちと体つきと）が一際秀でていて、麗色が衣を通して照り輝くように思えるところから、……人々はその乙女のことを、『衣通姫』と呼んでいた。（「古今集」仮名序、真名序。群書類従第十六輯「古今和歌集目録」参照）

良実と衣通姫との恋の炎は、いっきに燃え上がった。

そんな時、二人の仲を引き裂くような勅許が下った。

承和七年（八四〇）三月に帰洛の勅命を蒙むった良実は、もはやこの地に留まっているわけにもいかず、……衣通姫と別れて、京へ帰っていった。

衣通姫は、良実を慕って泣いた。

もっとも、この時（承和七年三月末か、四月初め頃）、まだ誰も気付いてはいなかったが、すでに衣通姫の腹中に良実の子が宿っていたのかも知れない。

一方、そのような事を知る由もない良実は、京へ着き、――しかる後に、抜擢されて『出羽守』となり、妻子を伴って任地の羽州へ赴いたのではなかろうか。

小町の誕生

衣通姫は、やがて、生まれながらにしてたとえようもなく可愛らしい女の子を産んだ。

それは、……判然としないが、承和七年三月末頃から数えて十月十日ばかり後（約九ヶ月後）の承和八年（八四一）春のことであったように想像される。

つまりこの物語では、

《小野小町は、承和八年（八四一）に生まれた》

と考えて話を進めていくことにしたい。

現在、肥後国合志の七国神社前に水をたたえる小野泉水のほとりには、由緒を記した立札があって、次のようにいう。

小野泉水（植木町指定文化財）

平安の昔女流歌人として又、絶世の美人として名高い小野小町の誕生の地で、この池の水を産湯に使ったと言い伝えられています。

植木台地唯一の石灰岩露出地域でもあり、平安風のロマンスを秘めた静かなたたずまいは、一幅の絵を見る様です。

近くの小野村の集落の中には良実の墓と伝えられるものもあり、又北側の横山には鬼のいわや古墳もあります。

昭和五〇年九月「植木の自然と歴史に親しむ会」と述べている。

（※　ただし、ここにいう『鬼のいわや古墳』（横山の中腹にある古墳）は、卑彌呼の墳墓ではあるまいと考えたい）

ところで、小野小町が承和八年（八四一）に生まれたとすれば、この時、祖父篁（八〇二～八五二）は四十歳だったことになる。

なお、先に引用したとおりに、

「孫をもつ祖父の（下限の）年齢は、常識的に四十歳ごろである」

という。（第九十四章〈篁は、小町の祖父かどうかについて〉の項において既述。「小野小町攷」小林茂美、桜楓社、四五～四六頁参照）

もしかしたら、

〈小野篁は三十歳台後半に早くも良実の娘『備前』の祖父となっていた。そして、篁四十歳の時に『小町』が生まれた〉

ということであったろうか。

＊

衣通姫は、その女の子を『小町』と呼んでいつくしんだ。

諸書によれば、

①小町の『まち』の語源は、「まうちぎみ」で、神につかえるという意味である。（「世界大百科事典」平凡社〈小野小町〉参照）

②そして、『町』は、まつる（祭・祀）の語と同系であり、巫覡が降神・招魂の作法をして尊貴神（人）を〝待ち斎く〟とおなじ意義を兼該（兼ねそなえること）していた。

「待ちいつく」ことの内容は、訪れる神を待ち、祭祀し、饗応（供饌・共食、女性ならば神妻として奉仕）することのいっさいである。だから、神の憑りつく代表的な聖樹も「まつ（松）」と名づけられている。（「小野小町攷」小林茂美、桜楓社、五一頁参照）

③また、『まち』という語は、もと区劃を示し、区劃された地域・建物などをいう。（「日本書紀」(下)日本古典文学大系、岩波書店、四八〇頁、注三参照）

と、種々説示されている。

ともあれ『小町』は、神官の家に生まれ育ち、祖父・祖母・母の強い影響を受けたように思われる。

後年、日照りが続いた時、小町のもとに「雨乞の和歌」を詠むようにとの宣旨が下ったという。

幼少の頃からすでに、神に祈ることが身についていた小町は、――雨乞のために作られた祭壇の前で、おごそかに神に祈願し、歌を詠んだのであろうと推察される。（追って詳述したい）

比古姫（日子姫）

小野良実が身を寄せた里の小山『横山』の由来をそれとなく知っている衣通姫の父母達は、輝くばかりに美しい孫娘『小町』を見るにつけ、大いに感嘆して、

「日の御子の生まれ替わりであろうか」

と思い、……『日子姫』という愛称ででも呼んだのかも知れない。

- 荒唐無稽だとしてともすれば無視されがちであるが、『古今和歌集目録』には小野小町について、

「出羽國郡司女。或云。母衣通姫云々。號二比右姫一云々」

とある。（群書類従第十六輯「古今和歌集目録」参照）

- もっとも、

「三十六歌仙絵巻に、『比古姫』とある事により、『比右姫』は、『比古姫』の誤写であろう」

といわれている。（「小野小町」前田善子、三省堂、一五五頁参照）

- 但し、この当時の貴族の子女の公名は「何々子」と命名するのを一般的としており、「何々姫」の例は、源潔姫・源貞姫・藤原祐姫・藤原淑姫・藤原時姫等の少数に止まっている。

「思ふに、この比古姫もたとひ信じ得るとしても、公名ではなく、幼少の頃の家庭に於ける愛称であったと思はれる。さすれば、他に（小町や比古姫の他に）公名がある筈であるが、今、その名を知る術はない」

という。（「小野小町」前田善子、三省堂、一五五頁参照）

小町の母『衣通姫』や、『小町』や、『比古姫』など、愛称だったのだろうか。

なお、先述のように、

〈小町は、「日の御子の姫君」という意味を込めて『日子

姫』（比古姫）とも呼ばれたのだろう〉と思われる。

それは、――七国神社の祭神『日御子』（＝天照大神）にあやかろうとしてのことだったのではなかろうか、と想像される。

良実と小町との出会い

母衣通姫は、我が娘が美しく育っていくのを見るにつけても、哀れに思わずにはおれなかった。

「遠い出羽国へおいでになられたというあのお方に、文でお知らせしようかしら」

とも思われたが、妻子のある良実のもとへ文を送りつけたら、どういうことになるものやらと案じられ、ためらわれるのだった。

そうこうしているうち、さらに数年が飛ぶように過ぎ去っていった。

「やはり、良実様のもとへ行かなければいけないのよ。良実様に、この子をお引き合わせして、一目でも見ていただきたいわ」

こう思うと、もう矢も楯もたまらず、衣通姫は小町の手を引いて、東国のはての出羽国へと旅立った。

＊

衣通姫は、途中、小野氏の本拠地である近江国滋賀郡小野の邑（大津市の北方約十六キロ）を訪ねた。

すると邑長は、何と、こう言った。

「良実様は、出羽守から大和守へと御昇進されることになった。もうしばらくの間、この小野の邑でお待ちなさるがよい。良実様は、羽州から船で越前国敦賀へお着きになった後、きっと此処小野の邑にお立ち寄りになるでしょうから」

すすめられるままに、衣通姫は、小野の邑に滞在し、……一日千秋の思いで待った。

＊

因みに述べると、東北地方の平定がすすんだころには、日本全国に七十三国があり、それぞれに大国・上国・中国・下国の等級がつけられていた。

大和・河内・近江・伊勢・上野・常陸・武蔵・上総・下総・陸奥・越前・播磨・肥後

の十三ヶ国が大国であった。

大国とは、かならずしも土地が広かったり産物が多かったりするだけで指定するのではなく、より政治的に重要な国を指しているようである。（「熊本県の歴史」森田誠一、山川出版社、三九頁参照）

察するところ、

〈小野良実は、上国出羽国の守から、大国大和国の守へ昇進したのであろう〉

と思われる。（「延喜式」虎尾俊哉、吉川弘文館、一四四頁〈『延喜式』による行政区分図〉参照）

なお、肥後国は、初めは『上国』であったが、延暦十四年（七九五）に西海道で唯一の『大国』となったという。（「熊本県の歴史」森田誠一、山川出版社、三九頁。「新・熊本の歴史」(2)熊本日日新聞社、二一〇頁参照）

＊

こうして、小野の邑の人達の温かいはからいにより、近江国玉造庄（不明。あるいは琵琶湖北岸の『玉作神社』あたりか）において、――衣通姫は、長年想い続けてきた良実と再会した。

案内されてやってきた良実は、女の子を連れた女人の姿を認めた。

「おお、そなたは、衣通姫ではないか」

「おなつかしゅうございます」

二人は手をとりあい、胸を掻い抱いて、嬉し涙にむせんだ。

良実は、……あの切なくも心楽しい時を共に過ごした衣通姫が、こんなにも慕って、はるばる訪ねて来てくれたことを喜んだ。

衣通姫も、長い長い空白の時を埋めるかのように、熱い思いを語った。

「お別れした翌年の春に、この子が生まれたのですよ」

そして、衣通姫は、娘の手をとりながら言った。

「良実様、ほら、この子を御覧になって下さい。目もとなど、貴方様にそっくりでございます。この子『小町』をどうか一目見ていただきたくて、ここまでやって参りました」

衣通姫は、胸をついてこみ上げてくる嬉しさに、さらに涙した。

その子『小町』は、年の割にはしっかりした、なかなかに美しい女の子だった。

良実は、

〈この天賦の麗質を備えた我が娘を、遠い鄙の地に埋もれさせてしまうのは惜しい〉

と思った。

とはいえ、良実の心の内には、少なからぬ戸惑いがあった。

〈若さ故とはいえ、……流罪の身でありながら生ませた我が子『小町』のことについて、どのように公に釈明したら

よいものだろうか〉
と迷った。
　そして考えたあげく、良実は、我が子『小町』を『猶子』（養子）として引き取り、我が子として育てることとしたように推察される。
　もしも事の真相が知られたならば、口うるさい都人達は、「肥後国に流された時、表向き神妙に祈誓を起こし、七ヶ所の霊社を合わせ祭ったりしながら、……裏ではこともあろうに、女に子供を産ませていたのだな」
「ほんとに、お笑い種ね」
などと噂しあい、……やがて、尾鰭のついた話が広まってゆくに違いない。
　しかしながら、
〈『小町』を『猶子』（養子）として引き取るならば、あやしむ者など居まい〉
と思われたのであろう。
　先に述べたように、『搨鳴暁筆抄』（写本・静嘉堂文庫蔵）には、
「彼良実大和守になりて上洛し侍る時、近江国玉造庄にて独の小女に行逢り、則猶子（養子）とせり、小町といふこれなり」
と記されている。（「小野小町」前田善子、三省堂、一四六頁参照）
●なおここに、
「彼良実大和守になりて上洛し侍る時、云々」
と述べられていて、注目される。
　この文章は、
〈都から離れた所に居た良実が、大和守に任命されて、平安京へ上ってきた〉
ことを示している。
●もっとも、肥後国に流されていた良実が、いきなり大国『大和国』の守に任命されて上洛したとは考えにくい。
■なるほど定かでないが、この物語では、
〈都から遠い出羽国に居た良実が、大和守に任命されて、平安京へ上ってきた〉
と解釈してみたい。
●すなわち、
《小野良実は、大和守に任命され、出羽国から平安京へ上洛する途中、……近江国玉造庄にて小町と行逢い、則猶子（養子）とした》
という意味なのであろう、と想察される。
■なお、

●小野篁の次男良実は、もしも承和六年（八三九）に二十歳であったとすると、……大和守に着任したと思われる承和十三年（八四六）当時、二十七歳となっていた勘定になる。（第九十四章〈小野良実の官職について〉の項参照）

●出羽守としての経験をもつ二十七歳となった小野良実が『大和守』に抜擢されたというのであれば、首肯し得るように思われる。

＊

先に、第九十四章〈小野良実の官職について〉の項において、

「小野良実は、承和七年（八四〇）末以降に出羽守となり、……承和十三年（八四六）正月十三日以前まで、その任についていたのかも知れない」

と述べた。

それでは、

〈小野良実は、承和十三年正月頃、大和守に任命された〉

と考え得るのだろうか。

■ここにまず、承和七年（八四〇）三月に良実が帰洛の勅命を蒙むった時点以降の、――『大和守』の任命記事を抜粋してみよう。（「六国史索引」(三)吉川弘文館〈大和守〉参照）

①承和八年（八四一）正月十三日。正躬王任。
②承和十年（八四三）正月十二日。紀長江任。
(3) ――　――
④嘉祥二年（八四九）七月一日。清瀧河根任。
⑤嘉祥三年（八五〇）五月十七日。丹墀門成任。
⑥仁寿三年（八五三）四月十日。豊前王任。
⑦天安元年（八五七）正月十四日。安倍貞行任。
⑧天安二年（八五八）二月二十八日。藤原氏雄任。

■以上の通りであって、ここに注目されるのは、〈②～④の間が六年間もあり、少々長い〉ということである。

■参考迄に述べると、国司制について、こう説示されている。

「国司は律令制下の地方官。守・介・掾・目の四等官があり、その下に史生・国博士・国医師がいた。これらの定員と官位相当は、第6表のように、国の等級によって異なっていた。

任期は、大宝令では六年、慶雲三年（七〇六）格で四年とされた。藤原仲麻呂（七〇六～七六四）の政権下で一時六年とされたが、ほとんどの時期は四年であった。しかし現実には、平均して二年半程度で交替していたらしい」

57

第6表　養老令における国司の定員と官位相当

	大国	上国	中国	下国
守	従五位上 1	従五位下 1	正六位下 1	従六位下 1
介	正六位下 1	従六位上 1	――	――
掾 大	正七位上 1	従七位上 1	正八位上 1	――
掾 少	従七位下 1			
目 大	従八位上 1	従八位下 1	大初位下 1	少初位上 1
目 少	従八位下 1			
史生	3（4）	3（3）	3（2）	3（2）
国博士	1	1	1	1
	（1～4国に1）			
国医師	1	1	1	1

（　）は728年（神亀5）の改正による定員

5,390P

という。（「日本史辞典」東京創元社〈国司制〉参照）

■そこで、この物語では、仮りに、――小野良実は、父小野篁の昇進にともなって異例の出世をし、

●承和十三年（八四六）正月ころ、出羽守から大和守に抜擢され、

●そして、嘉祥二年（八四九）七月一日ころ、大和守からさらに上位の位階へ昇進した、

と想定したい。

●なお、前述の~~すでに述べた~~ように、大和国は『大国』とされていたので、

〈大和守小野良実は、従五位上相当であった〉

ということになる。（第6表参照）57

■とはいえ、後世、故あって、

〈小野小町の出生にまつわる事実の多くが抹消されることとなり、――父良実の経歷などの全てが歴史書から削除されたのであろう〉

と思われる。

＊

ところで、現在、近江国伊香郡木之本町千田（余呉湖の東南約三キロ）に、『石作神社・玉作神社』という神社がある。（「日本社寺大観」神社編、名著刊行会、三六九頁参照）

47

『石作神社・玉作神社』の社伝によると、

「創祀年代詳ならざるも、『三代実録』清和天皇の貞観七年三月二十八日条に『伊香の孝子石作部廣継の女』等と見えたるを以てすれば、此地石作部氏の住所にして、其族が祖神を祀りしに起原せるものなるべし。醍醐天皇延喜の制小社に列す。当時石作神社、玉作神社各一社あり。後、合して一社となれり。云々」

という。

■あるいは、

〈もともと、『玉造庄』および『玉作神社』は、敦賀と琵琶湖北端を結ぶ街道沿い（伊香郡内）にあったが、――ある時、現在地の石作神社と合わせて一社とした〉

ということなのだろうか。（不明）

あえて述べると、伊香郡西浅井村の大浦川中流域に「庄村」がある。

■しかしながら、

〈『玉作神社』は当初から現在地（近江国伊香郡木之本町千田）の近傍にあり、『玉造庄』もこのあたりにあった〉

のかも知れない。

■もっとも、『石作神社・玉作神社』の現在地は、羽州から敦賀を経て琵琶湖西岸の「小野の邑」へ向かう道筋から少しばかり《東へ》ずれた所に位置している。

もしかしたら、良実と衣通姫との再会に当っては、……小野の邑の人々の「良実の妻への気遣い」があったのではなかろうか。

■恐らく、

〈小野の邑の人達は、良実をそっと『玉造庄』へ連れていって、密かに衣通姫に引き合わせたのであろう〉

と想察される。

都での噂

良実は、あれこれ理由をつけ、『小町』を猶子（養子）として引き取った。

ところがそれでも、小町のまばゆいばかりの美しさに見とれて目を丸くした都人達は、なにかと詮索し、噂をせずにはおれなかった。

「出羽守として出羽国へ行っておいでになった間に、あんなにも可愛い娘子をもうけて、都に帰っていらっしゃった。見れば見るほどうっとりするような女の子ですこと」

「ほんとにねえ、目の醒めるような容姿だわ。これから、もっともっと綺麗になっていくのでしょうね」

「でもね。……私噂に聞いたことなんだけど、良実様が出

羽郡司だった時に、領地の女に生ませたんですってよ。本当かしら」

「あら、あの子は実の子じゃないみたいよ。近江国で養子にしたっていう話よ」

「まあそうなの。わたしは今迄、肥後国の配流先で生まれた子だとばかり思っていたわ。だってあの子は『ひこ姫』とも呼ばれているでしょう。『肥後姫』の意味だと思うじゃないの」

「そうよ、私もそう思っていたわ。上の子が『備前』でしょ。だったら下の子は『肥後』だと思うわよねえ。でも、……どうして下の子にだけ『姫』をつけて呼ぶのかしら。少しおかしいわね」

篁や、良実ばかりでなく、小町自身さえも、ことの真相については決してあかそうとしなかった為、……いよいよ人々の噂話に枝葉がついて、広まっていったように想像される。

小町の素養

出羽国から、近江国を経て上洛した良実は、朝廷での正式な任命を待つ間、……平安京の篁の邸宅に留まっていた、と考えてみたい。

〔※　因みに述べると、西国巡礼第十七番札所「六波羅蜜寺」の東北方すぐ、八坂の塔寄りに『小野篁卿舊跡』と刻んだ石碑が立てられている〕

篁もまた、あどけないながらもなかなか利発な孫娘を得て、大いに喜んだに違いない。

なお、博学・能文・能書ぶりについて「当時の本識なり」とたたえられ、「文章は天下無双、草隷（草書）は二王に譲らず」といわれたほどの篁は、――自ら手をとるようにして、「己の罪が遠因となって生まれた」孫娘小町に、将来必要になると思われるさまざまなことを教え込んだのかも知れない。

一方、たぐいまれな資質に恵まれた小町は、驚くばかりの早さで数多くの学問・芸術等の悉くを実になんなく覚え込み、高度な知識さえも吸収、習得していったのであろう。

「ゆくゆくは、宮中に仕えさせるつもりの小町を、大和国へ連れて行くのはよくない」

大和守となった小野良実は、大和国の任地へおもむくに際し、――孫娘にかかりきりになっている父篁のもとに、小町を預けたのではあるまいか。

こうして小町は、京に居て、

「京風の雅」

・カラー
・右頁の上段右側(1/4)に、大きくはみ出して載せて下さい!

5,393P

50

大カニ7 1851 舊跡 キウセキ

14Q9 写真図版 795 『小野篁卿舊跡』の石碑 (右は著者)

の中にその幼い日々を過ごしたように推察される。

小町は、祖父篁の家において、日々厳しい教育を受け、習字・和歌・音曲等々恥しくない素養を身につけ、……起居振舞も艶やかに、言葉遣いも優雅に、磨きがかけられ育っていったのだろう。

篁の病

●小野良実が大和守になったのは、仁明天皇の承和十三年（八四六）正月頃のことであったろうか。（既述）

●そして、翌年の承和十四年（八四七）正月十二日に、小野篁は参議となった。（第九十四章〈小野篁の子、良実〉の項において既述）

●それから二年後、――仁明天皇の嘉祥二年（八四九）五月に病を得て官を辞した篁は、家に引きこもり、静養することとなったようである。

記録が少々乱れているが、小野篁について、こう記されている。

1『文徳実録』仁寿二年（八五二）十二月二十二日条〈新訂増補国史大系〉の篁伝に、

承和十五年（八四八）春正月、転二左大弁一。兼二信濃守一。夏四月又兼二勘解由長官一。

仁寿二年（後文からみて、嘉祥元年の誤りであろうという。嘉祥元年は承和十五年と同年）春正月転二左大弁一。餘皆如レ故。明年（嘉祥二年。八四九）春正月加二従四位上一。夏五月以レ病ヲ辞レ官ヲ帰レ家ニ。三年（八五〇）四月加二正四位下一。

仁寿元年（八五一）春正月遥二授近江守一。明年（八五二）春病瘳（病気がなおる）。復為二左大弁一。後又病発（出仕せず）不レ朝。天皇深為二矜憐（あわれむこと）一、数遣二使者一、趣二視病根一、賚二賜銭穀一。冬十二月就レ家、敍二従三位一。及二困篤一、命二諸子一曰。氣絶則殮（かりもがり）。莫レ令二人知一。

薨時年五十一。

篁身長六尺二寸（約一八八チセン）。家素清貧。事レ母ニ至孝。公俸ニ所レ当、皆施二親友一。

2『古今和歌集目録』〈新校群書類従巻第二百八十五〉に、

小野朝臣篁。

廿五年（承和十五年の誤り）正月十三日左大弁。兼二信濃守一。四月三日勘解由長官。

嘉祥三年（後文からみて、嘉祥二年の誤りであろう。八四九）正月十日従四位上。五月以レ病ヲ辞レ官ヲ、停二左大弁一。三年（八五〇）四月十七日正四位下。十月停二大弁一。三年四月十七日正四位下。十月停二勘解由長官一。四年

（八五一）正月十一日兼二近江守一。
仁寿二年（八五二）春病瘳（病気がなおる）後任二左大弁一。十二月十九日従三位。十二月廿二日薨。歳五十一。

とある。

■ここに、1と2の二つの記事を突き合わせてみると、嘉祥二年（八四九）五月以後の篁の経歴、および病状は、次の通りであったように思われる。

●嘉祥二年（八四九）五月、
「以レ病ヲ辞レ官ヲ帰レ家ニ」
「以レ病ヲ辞レ官ヲ、停二左大弁一ヲ」
●嘉祥三年（八五〇）四月十七日（文徳天皇即位の日）、
「加二正四位下一ヲ」
「正四位下」
●嘉祥三年（八五〇）十月、
「停二大弁一ヲ」「停二勘解由長官一ヲ」
●仁寿元年（八五一）正月十一日、
「遥二授近江守一ヲ」
「兼二近江守一ヲ」
●仁寿二年（八五二）春、
「病瘳（病気がなおる）。復為二左大弁一」
「病瘳後任二左大弁一」
●仁寿二年（八五二）春以後のある時、
「後又病ヲ発シテ不レ朝（出仕せず）。（文徳）天皇深ク為二矜憐一ヲ、数遣二使者一ヲ、趣二視病根一ヲ、賚二賜錢穀一ヲ」
●仁寿二年（八五二）十二月十九日、およびその後、
「就レ家ニ、敍二従三位一ヲ。及二困篤一ニ、命二諸子一ニ曰ク。氣絶則殮。莫レ令二人知一ヲ（人に知らしむなかれ）」
「従三位」
●仁寿二年（八五二）十二月二十二日、
「薨時年五十一」
「薨。歳五十一」

■この物語においては仮りに、小野篁は、
●嘉祥二年（八四九）五月に、病を以って官を辞し、左大弁を停めた時から、――明年の嘉祥三年（八五〇）四月十七日に、正四位下とされるまでの約一年間、
●および、同年の嘉祥三年十月に、（左）大弁・勘解由長官を停めた時から、――仁寿二年（八五二）春に、病がなおって、左大弁に復帰するまでの一年余の間、自宅療養していたのであろう、と考えてみることにしたい。
篁は、その間、家に居て、寝たり起きたりの日々を過ごしていたのではなかろうか。
仁明朝末年の嘉祥三年（八五〇）当時、篁は四十九歳だっ

た。孫娘の小町は、丁度十歳であったろうと思われる。
そして祖父篁（竹やぶの意）に多くを学んだこの時期こそ、後の小町に大きな影響を与えたものと推察される。（後述）

＊

■なお、
〈姉『備前』が、小町と共に祖父篁を師としたのかどうかについては分からない。

■また、
〈母『衣通姫』が、京都、もしくは大和国に住んだのか、……それとも故郷（肥後国）へ帰っていったのか、あるいは小野氏の本拠地である近江国滋賀郡小野の邑に居住したのか〉
などといったことについても、詳らかでない。

●しかし、あえて述べると、
(1)母衣通姫が、小町と共に同じ邸内に住んだのでは、――小町が甘えて、教育の妨げになろう。
衣通姫と小町とが、京都の小野篁の家に同居したとは考えにくい。
(2)大和守小野良実の邸宅には、正妻が居たに違いない。
衣通姫が、小町と離れて、大和国に住むのはつらいことであろう。
(3)小町を小野良実に渡した衣通姫が、遥かに遠い肥後国へ、一人で帰っていったとも想像しにくい。
小野良実は、衣通姫と小町とを引き裂くような、そんな無情なことをした筈があるまい、と思われる。

●そこでこの物語では、
〈衣通姫は、近江国滋賀郡小野の邑に住み、良実がときおり訪ねてくるのを待ちわびたのだろう〉
と考えてみたい。

●母衣通姫が、京都からそんなに離れていない近江国の小野の邑に居て、見守っていたから、……小町は、安心して、種々のならいごとに心を打ち込むことができたのではなかろうか、と想到される。

良岑宗貞（僧正遍昭）の出家

仁明天皇（八一〇～八五〇）が崩御されたのは、嘉祥三年（八五〇）三月二十一日のことであった。
左近少将良岑宗貞（後の僧正遍昭）は、それまで恩寵をたまわった仁明天皇の崩御を契機に、――七日後の三月二十八日に出家した。

●『文徳実録』嘉祥三年三月二十八日条に、

「左近衛少将従五位上良岑朝臣宗貞。出家シテ爲ル僧ト。宗貞。先皇之寵臣也。先皇崩後。哀慕無シ已。自帰ニ仏理ニ。以テ求ム報恩ヲ。時ノ人愍ム焉」

とある。

●また、『三代実録』仁和元年（八八五）二月十三日条の『権僧正法印大和尚位遍昭の上表文』では、遍昭は出家当時を回顧して、

「小僧初剃レ髪之日。心誓自謂フ。鏗ニ跡ヲ俗間ニ。終ニ命ヲ山窟ニ」

と決意した由を述べている。（「小野小町攷」小林茂美、桜楓社、二二七～二二九頁参照）

●そして『大和物語』一六八段には、

「この帝（仁明天皇）うせ給ひぬ。御葬の夜、御供にみな人つかうまつりける中に、その夜よりこの良少将うせにけり。ともだち・妻も『いかならむ』とて、しばしはここかしこ求むれども、音耳にもきこえず。……（中略）……初瀬の御寺（長谷寺）にこの妻まうでにけり。この少将は法師になりて、蓑ひとつをうちきて、世間世界を行ひありきて、初瀬の御寺に行ふほどになむありける」

とある。

尚、良少将とは、少将良岑宗貞のことである。

●一方、『古今集』巻十六―八四七の僧正遍昭の歌の詞書には、

「仁明天皇の御代に蔵人頭として昼夜帝の身近にお仕へしていたが、帝が亡くなって世は諒闇（天子が父母の喪に服する期間）になってしまった。以来、世間づきあいを全く絶ち、比叡山に登って頭をおろしてしまった」

とある。（「古今和歌集」日本古典文学全集、小学館、三二二頁の〈注解〉参照）

＊

少将良岑宗貞（遍昭）は、仁明天皇崩御以来、世間づきあいを全く絶ち、法師になって、蓑ひとつをうちきて、世間世界を修行してまわり、初瀬の御寺（長谷寺）などを渡り歩き、〈その後〉比叡山に登ったのかも知れない。

■予め述べると、この物語では、

〈仁明天皇が崩御された嘉祥三年（八五〇）三月二十一日の七日後の三月二十八日に出家した遍昭は、先ず布留の『石上寺』へ行き、一年後の仁寿元年三月二十一日（仁明天皇の忌明けの日）の直後に『石上寺』から失せ、……『清水寺』へ行き、さらに『長谷寺』で修行し、その後の斉衡二年（八五五）五月、比叡山に登った〉

と考えてみたい。

■なお、奈良市と桜井市との中間に位置している山辺郡石上郷大字布留は、良岑宗貞（遍昭）と非常に深いかかわりがあったようである。

■だが、そのようなこまごました詳細については、追って述べることにしよう。

大和国への旅

文徳天皇（八二七～八五八）は、仁明天皇の第一皇子で、父仁明天皇が崩御された嘉祥三年（八五〇）三月二十一日の翌月、四月十七日に大極殿に於て即位された。（文徳実録）

文徳天皇即位のその日、つまり嘉祥三年（八五〇）四月十七日に、小野篁の位階は正四位下とされた。

ところが、その約半年後の十月頃、篁の病状は再び悪化したのであろう。

同年十月、篁は、大弁（左大弁）を止め、勘解由長官も止めた。

しかし、その後、篁の病はかなりよくなっていったように思われる。

仁寿元年（八五一）正月十一日には、近江守を兼ねて復帰することになっていた。

この仁寿元年（八五一）正月、祖父篁は、

「皆で、大和国へ行こう」

と言い出した。

「まあ嬉しいわ。わたし、どの着物を着てゆこうかしら」

小町は、祖父や父と共に旅に出かけることを、大いに喜んだ。

かつて大和守であった良実にとっても、大和国は思い出深い、なつかしい所であった。

■なお、『古事記』の孝昭天皇段によれば、孝昭天皇の皇子、天押帯日子命を祖と仰ぐ同族氏族として、春日臣（もと和爾臣と称した）・大宅臣・粟田臣・小野臣・柿本臣などがみえており、――これらの氏族を、今日では一般に、和珥系氏族と呼び慣わしている。

●和珥氏は、もともと奈良盆地東北部に居住していた古代豪族である。

●天理市櫟本町和爾には、『式内和尓坐赤坂比古神社』が鎮座している。

●また、そのすぐ南に近接する東大寺山の麓には、『式内和尓下神社』がある。

●小野氏は、和珥氏の一族として、奈良盆地東北部や、近江国滋賀郡小野村などに分布した、

という。（「日本史辞典」東京創元社〈和珥氏〉〈小野氏〉参照）

■そして又、

「遣隋使・小野妹子の孫にあたる小野毛野が建てた小野氏の氏寺『願興寺』の跡とみられる白鳳時代（七世紀末から八世紀初めに創建）の寺院の塔基壇跡が、――奈良県天理市和爾町の農地から出土した」

という。

奈良県立橿原考古学研究所の発表によると、

●人の頭大の自然石を四辺に積んだ正方形の基壇で、一辺十二・七㍍の上段と、一辺十四㍍の下段の二重になっていた。規模などから、五重塔跡とみられる。

●基壇の南側には幅約五㍍、北側にも幅約二㍍の玉石敷きの参道があり、塔の周囲には一辺約三十四㍍の土塀跡もあった。

●寺域は、南北約百七十㍍、東西約百三十㍍と推定している、

という。（「朝日新聞」平成九年四月十一日付〈小野妹子の孫が建立、願興寺？の塔跡出土〉参照）

あるいは篁は、残る命の短いことを察して、小野氏の元来の本拠地というべき奈良盆地東北部を訪ね、小野氏の興隆を祈願したいと思ったのかも知れない。

孝昭天皇と敏達天皇

●先述のように、孝昭記には、

「孝昭天皇の皇子天押帯日子命は、春日臣・小野臣・柿本臣らの祖先である」

と記されている。

●とはいえ一方、『大系図』、『尊卑分脈』、および続群書類従『小野氏系図』（その三）には、

「敏達天皇―春日皇子（敏達天皇の皇子）―妹子……峯守―篁……」

としるされている。

●つまり、小野氏の祖先は、『孝昭天皇』なのか、それとも『敏達天皇』なのか、分からないわけである。

●しかしながら、第1表により、次のように対比して考えてみたい。

①「神武―綏靖―安寧―懿徳―孝昭……」

②「継体―安閑―宣化―欽明―敏達……」

ここに、孝昭天皇と敏達天皇とが、まさしく同等の順位に並ぶことが分かる。

●もしかしたら、

〈小野臣や柿本臣らの祖先は孝昭天皇であるにもかかわら

ず、――『大系図』、『尊卑分脈』、および続群書類従『小野氏系図』（その三）の執筆者達は、あえて、ついついうっかり間違えたことにして〔孝昭天皇に相当すると考えられる〕敏達天皇の名をかかげた〉

というやや強引な次第なのかも知れない。〔参考九の冒頭部分参照〕

●なるほど証拠立てるのはむつかしいが、この物語では、〈小野臣や柿本臣らの祖先は、――欽明天皇（在位五三〇頃～五七一）あるいは敏達天皇（在位五七二～五八五）とほぼ同時期の日辺日本国（近畿地方）の孝昭天皇であったろう〉

と考えたい。（第八十四章〈柿本人麿の苦悩〉の項において既述。第1表参照）

●すなわち、

〈小野氏の祖先は、東の日辺日本国（近畿地方）の『孝昭天皇』の皇子天押帯日子命に溯るのだろう〉

と思われる。

石上寺

篁が率いる一行は、船に乗って泉川（木津川）を溯り、輿に乗り替えて奈良山を越え、平城において大和守丹墀門成に迎えられたのではなかろうか。

そして翌日、篁・良実らは、牛車を連らねてにぎにぎしく平城から南下していったように想像される。

篁・良実・小町ら小野氏一族は、天理市櫟本町和爾の『式内和尓坐赤坂比古神社』および『式内和尓下神社』に参拝し、小野氏の氏寺として建てられた『願興寺』に詣でた後、……あるいは、さらに足を伸して布留の『石上神宮』へとやってきたことだろうか。

こうしてやがて、篁らは、布留の『石上寺』へ到ったのであろう、と考えてみたい。

なお、『後撰和歌集』・『小町集』が主張する『石上寺』の寺址については、

①山辺郡石上郷大字石上の在原山本光明寺（又の名を磯上寺という）とする説、

②山辺郡石上郷大字布留にあった良峰石上寺とする説、

の二つの説がある。

■前者について、『名跡幽考』は在原業平の住居跡といい、『広益俗説弁』は業平の葬地という。

■後者の良峰石上寺について、『名所図会』・『大和志』などは、別名を良峰寺・良因寺とも称している。

良岑宗貞（遍昭）及びその子素性法師（俗名玄利、別称

良因朝臣）の名をとって、『良峰寺』・『良因寺』と呼ぶようになったのであろうか。

この良峰石上寺（更に別名、今宵薬師堂ともいう）には、――天長年中（八二四～八三四）善守法師が住持し、のち遍昭、その子ら由性（少僧都、雲林寺・延暦寺別当）・素性（俗名玄利、別称が良因朝臣、左近将監、出家後権律師）が幽居したと記されている。（「小野小町攷」小林茂美、桜楓社、二五九頁。「帝国地名辞典」太田爲三郎、名著出版、九七七頁〈丹波市〉〔古の石上郷〕参照）

ともあれ、篁らは、……偶然にも、当時遍昭が修行中であったと思われる『石上寺』へやってきたように推察される。（「後撰和歌集」参照。後述）

時康親王（後の光孝天皇）と、良岑宗貞（後の僧正遍昭）との深い絆

それでは、小町と遍昭との贈答歌について述べる前に、……良岑宗貞（僧正遍昭）の幼少時代以降～文徳天皇の仁寿元年（八五一）正月までの経緯を、振り返って見ておくことにしよう。

良岑宗貞の生年については、嵯峨天皇の弘仁五年、同六年、同七年と三説あるが、「光孝天皇の仁和元年（八八五）十二月十八日七十賀」（三代実録）から逆算すると、弘仁七年（八一六）生まれとなり、『皇胤紹運録』と一致するので、通常、これが基本とされている。（「小野小町」前田善子、三省堂、一七二頁。「広辞苑」〈遍昭・遍照〉参照）

そこで、良岑宗貞（遍昭）は、八一六年に生まれ、八九〇年七十五歳で没したと考えてみたい。

＊

桓武天皇の皇子良峯安世（正三位大納言右大将）の子として生まれた宗貞は、少年時代を奈良県の石上あたりで過ごしたようである。

なお、遍昭の母の宅址が石上にあったと、『大和志』が伝えている。

また、遍昭の歌に、大和ないし石上がしばしば出てくる。

こうしたことから、

〈幼少時の良岑宗貞は、石上のほとりで過ごしたろう〉

と目崎徳衛氏はいう。

さらに、布留の石上寺が良峰寺・良因寺と呼ばれ、遍昭・由性・素性の幽居も伝えられているからには、――そこが、遍昭等良岑氏にとって、古いゆかりのある場所であったこ

とは首肯できる。（「小野小町」前田善子、三省堂、一七一頁〈系図〉。「小野小町攷」小林茂美、桜楓社、二五九～二六〇頁参照）

＊

ところで、淳和天皇の天長八年（八三一）に、――この当時の皇太子正良親王（二年後の天長十年（八三三）に即位される仁明天皇）の第三皇子時康親王（後の光孝天皇）がお生まれになった。（「三代実録」光孝天皇即位前紀。「日本史辞典」東京創元社〈仁明天皇〉。「皇室大百科」朝日通信社、二二〇頁〈仁明天皇〉参照）

時に、良岑宗貞は、十六歳だった。

その頃からであったろうか、……それともも少し後からであったろうか、定かでないが良岑宗貞の母が、時康親王の乳母になったようである。（目崎氏説）

良岑宗貞はやがて（時康親王が物心つく以前に）官職につき、――仁明天皇の寵をうけて累進し、備前守・左近衛少将・蔵人頭になったと理解される。（「人名大事典」むさし書房〈遍照〉。「世界大百科事典」平凡社〈遍昭〉参照）

ところが、嘉祥三年（八五〇）三月二十一日に、仁明天皇が崩御された。

この時、時康親王は二十歳、良岑宗貞は三十五歳であった。

《つまり、この時点迄の時康親王と良岑宗貞との間には、仁明天皇（時康親王の父）又は乳母（良岑宗貞の母）を介しての関連性しかなく、……二人は未だ、格別な友好関係に至っていなかったであろう》

と推測される。

＊

良岑宗貞は、仁明天皇が崩御された嘉祥三年（八五〇）三月二十一日の七日後の三月二十八日に出家し、母の家の近くの布留の『石上寺』で密かに修行していたのではなかろうか。

なお、参考迄に述べると、

「平安朝当時、諒闇（天子が父母の喪に服する期間）は、一ヶ年間と定められていた」

という。（「竹取物語・伊勢物語・大和物語」日本古典文学大系、岩波書店、三三七頁、注二二参照）

先にも述べたようにこの物語では、

〈遍昭は、仁明天皇の御喪があけた翌仁寿元年（八五一）春三月二十一日までは『石上寺』において修行していたが、――その直後頃に、その寺から忽然と失せてしまった〉

と考えてみたい。（「大和物語」一六八段参照。追って詳述）

すなわち、

〈遍昭は、仁明天皇がお亡くなりになった嘉祥三年（八五〇）三月頃から、篁・小町らが大和国へやってきたと思われる翌仁寿元年（八五一）の正月を過ぎた頃までは、『石上寺』で起居し、修行していた〉

と仮定したい。

さて、仁明天皇の第三皇子時康親王（後の光孝天皇）が、布留へとおいでになったのは、――もしかしたら、嘉祥三年（八五〇）秋のことであったろうか。

この時、

〈時康親王は、布留の滝を遊覧し、幼い日々を過ごした地を懐かしく散策した後に……かつて、乳母として仕えてくれていた遍昭の母の家をお訪ねになったのであろう〉

と拝察される。

時康親王（後の光孝天皇）は、布留の滝を遊覧された際、遍照の母の家に投宿（宿をとること）されたといい、――その折りに、遍照がおもてなしし、詠んで奉ったとされる献詠歌が、『古今集』および群書類従本『遍昭集』にみえる。

■『古今集』巻四―二四八には、こう記されている。

仁和帝（光孝天皇）、親王におはしましける時、布留の滝御覧ぜむとておはしましける道に、遍照が母の家に宿り給へりける時に、庭を秋の野につくりて、御物語（昔の思い出話などのことである。時康親王が乳呑児の頃の話であろう）のついでによみて奉りける。

僧正遍照

里はあれて人はふりにし宿なれや
庭もまがきも秋の野らなる

〔大意〕この布留の里は荒れておりますし、家の女主人（遍照の母）も年老いてしまった住まいだからなのでございましょう。庭といわず、垣根といわず、一面の秋の野良でございます。

もっとも、当時の貴族の家の庭は、田舎でも相当に立派なものであったろうが、それを謙遜して歌っているのである。

当の老母は、『我が子』が二人居るようにも思ったことであったろうか。

ことに、大切に大切に慈みお育てした時康親王が目映いばかりに頼もしく成人なされたその《麗しい御様子》を拝し、……乳母（遍昭の母）は、いたく感動していたに違いない。

■そして、群書類従本『遍昭集』にもほぼ同様のことが記

されている。

仁和のみかとのまたみこにおはしましし時ふるのたき御覧せんとておはしましけるみちに遍昭ははの家侍りけるに庭を秋野につくりていとおかしう御物かたりのついてによみたてまつりし

里はあれて人はふりにし宿なれや
庭も籬も秋の野となる

「時康親王が、布留の滝を御覧になるために、この里へおいでになった」

と聞いた遍昭は、『石上寺』から母の家へかけつけ、庭や籬を秋の風情のあるものにして出迎え、昔の懐かしい思い出話などでおもてなしをし、歌を作って奉ったものと思われる。

そして、これが大きなきっかけになって、時康親王（光孝天皇）と遍昭とは、強い絆で結ばれたのであろう、と想到される。

〈父仁明天皇の死を哀しんで出家したというこの男、――父が寵愛していたというだけあって、なかなかの人物であることよ〉

時康親王は、こう感じ取られたのかも知れない。

こうして遍昭は、この後貞明親王（陽成天皇）や時康親王（光孝天皇）の護持僧として仕え、光孝天皇の殊遇によって栄達することになる。（「小野小町攷」小林茂美、桜楓社、二二七～八頁、二五九頁参照）

このような背景を考え合わせてみるとき、……先ず最初に《小町と遍昭との間で『贈答歌』が取り交わされた所》は、布留の『石上寺』であったろう、と推察される。（おいおい詳述したい）

また、今井源衛氏も指摘しておられるように、

「岩の上に旅寝をすれば」

という小町の歌との呼応を考える時、舞台が京都から離れている方が、歌詞の『旅寝』にふさわしいことは、いうまでもない。（「小野小町攷」小林茂美、桜楓社、二五九～二六〇頁参照）

小町と遍昭の贈答歌（石上寺）

篁らは、仁寿元年（八五一）正月頃のその日、ずい分、あちこちを訪ね歩いてきたのであろう。

日は短くて、もう暮れようとしていた。

とはいえ、そんなに急ぐ旅ではないので、――この布留の『石上寺』で一夜を過ごし、夜が明けてからまかり帰ろう、ということになった。（以下、国歌大観所収『後撰和歌

集』。流布本系（群書類従本）『小町集』参照〉

つまり、初めからこの寺に泊まるつもりでやってきたのではなかった。

と、そのとき、ある者が、

「此寺で遍昭（すなわち良岑宗貞）とばったり出会いました」

と告げた。

篁は、仁明天皇の御代に親しくしていた良岑宗貞をなつかしく思い、……無理に頼んで、遍昭を呼び寄せた。

二人の話は尽きなかった。

そんな時、和歌に興味を持ち始めていた小町は、

〈物いひ心みむ〉

と思い、筆に墨をふくませると、こう書いた。

岩の上に旅寝をすればいと寒し
苔の衣を我にかさなむ

●なお、『古事記』の「国生み条」に、

「石を訓みてイハといふ。下これに效へ」

とある。（第六十五章〈野見宿禰〉の項において既述）

小町は、機智をきかせ、

〈『石上』の地名を、『イハノウヘ』と訓んで、この歌を作った〉

と解される。

●また、

「苔の衣は、僧侶・隠者の粗末な衣服のことである」

という。（「広辞苑」〈苔の衣〉参照）

小町は、上の句の『岩の上』に対応させて、下の句で『苔の衣』と詠んだのだった。

●つまり、小町は、

〈石上（イハノウヘ）に旅寝をすれば、（厳寒のこの時期）非常に寒うございます。僧衣（苔の衣）を私に貸していただけませんでしょうか〉

と歌ったのだった。

篁の孫娘から歌をもらった遍昭は、にっこり微笑んで、返歌をしたためた。

世をそむく苔の衣はただ一重
貸さねば疎しいざ二人ねむ

「寒いから僧衣を貸してほしい」という小町。「僧衣は一枚しかない。かといって、貸さなければ薄情者になるだろう。いっそのこと、私と一緒に寝ましょうよ、可愛いお嬢さん」

といったやりとりなのであろうと思われる。

この時、仁寿元年（八五一）正月に、篁は五十歳、遍昭は三十六歳だった。そして、小町は十一歳であったろうか。

＊

ところが、この贈答歌について、次のような見解がある。

①この話を仮りに史実とみとめた場合、その詞書からすれば、それは遍照の出家（嘉祥三年・八五〇）後まもなくの出来事と解釈できる。詞書にいう石上寺と、歌にいう「岩の上…」の呼応を原形とみなし、また出家の翌年（八五一）のことと考え、前田善子・角田文衛両氏説〔弘仁十一年（八二〇）小町出生説〕に従うと、遍照は三十六歳、小町は三十二歳の時となる。歌の内容から推しはかられる遊戯心理からみても妥当のようだ。

②横田幸哉氏の天長三年（八二六）出生説だと小町は二十六歳だが、当代の女流気質からすれば、この程度の戯れっけは充分に発揮できたであろう。

③が、岡一男氏の承和元年（八三四）出生説にたつと、小町十八歳の時となって、歌のイメージにそぐわないという懸念が残る。

④小町の誕生が承和八年（八四一）であれば、遍照と歌問答した八五一年には十一歳の少女になる。いかに天性の才女でも、三十六歳の遍照を相手どるにはませすぎている、という。（「小野小町攷」小林茂美、桜楓社、四五～四六頁参照）

●なるほど、こうした見解のように、

〈小町と遍昭との贈答歌を、ただ単なる言葉の上だけのたわむれの歌である〉

とみることも出来よう。

すなわち、小町と遍昭とが、

〈機智をこれ見よがしに鏤めた戯れっけばかりの言葉の遊びの歌を贈答して、愉悦感にひたった〉

とも解釈できよう。

●けれども、

〈果たして、本当にそうなのだろうか〉

と疑問に思われる。

●もしもそうだとすれば、

〈一大発心して僧となったはずの遍昭が、出家した翌年にはもう女性の魅力的な艶かしい誘惑に負けて、僧の身であるにもかかわらず、――たとえほんの言葉のあやだとしても、

「共に寝たい」

と歌った〉

ということになってしまうのである。

●また、小町も遍昭も、平安朝初期当時を代表する歌人で

あって、――二人が詠んだどの歌にも、馥郁とした高雅な香りがある。

〈その二人が、品格のない、言葉の遊びにすぎない低俗な歌を作りあった〉

などとは、到底首肯し得ない。

●それに、恐らく、

〈僧になったばかりの遍昭には、未だ『言葉の遊びを楽しむ』という余裕など無かったであろう〉

と思われる。

それは、仁寿元年（八五一）正月からわずか二ヶ月後の三月二十一日（仁明天皇の御喪があけた時）に、遍昭が作った次の歌からも推しはかれることである。

みな人は花の衣になりぬなり
苔の袂よかわきだにせよ

〔大意〕人々はみな忌明けとともに花やか（華やか）な着物に戻ったとはいえ、私はあの時以来黒装束のままである。だが、私の衣の袖よ、その涙がせめて乾きでもしておくれ。

（「古今集」巻第十六―八四七。「大和物語」第一六八段参照）

遍昭は、年が改まり、そして喪が明けたにもかかわらず、まだ、――仁明天皇の死を悲しみ、なげき暮らしていたのである。

それが、遍昭の真の姿であったに違いない。

なお、この歌については、追って詳述したい。

＊

あるいは、

〈小生意気盛りのこの年頃の娘にありがちなように、いっぱしの大人ぶった小町は、

「寒いから、僧衣を貸してほしい」

と、人の心を探るような歌（心みむ歌）を作った〉

のかも知れない。

なお、先に述べたように、仁寿元年（八五一）正月当時、

●篁は、五十歳

●遍昭は、三十六歳

●小町は、十一歳

であったろうと思われる。

小町は、祖父篁と睦まじく語りあっている遍昭の様子を見ているうち、……いつしか、その若い僧に対して『お兄さん』といった好感を抱き、親しくも歌を贈って返歌を求めたのではないだろうか。

ちょっと目には何とも大胆であり、あつかましいようにも受けとれるが、――しかし、人なつっこさが感じられるこの歌をつくってよこしてくれた小野篁の孫娘小町を見る

と、たしかに、かねてより噂に聞いていた通りのなかなかの美少女だった。

〈ああ、この子が小町という娘御か〉

とはいえ、どのように見ても、まだまだあどけなく可愛らしい乙女であった。

その愛らしい様子に、――遍昭は、ふと思い付いたいたずら心から、つい、からかい半分、かわいさ半分で、

「いざ二人ねむ」

と歌ったように思われる。

篁の孫娘小町が、愛くるしく、しかも親子ほども年が開いていたからこそ、……遍昭は、僧の身であるにもかかわらず、心ほだされる思いで、このような屈託のない歌をつくって答える気になったのだろう、と推察される。

＊

小町と遍昭との贈答譚は、『後撰和歌集』（巻十七―一一九五～一一九六）・『大和物語』（第一六八段）・『遍昭集』・『小町集』のそれぞれに採録されている。（以下、「小野小町攷」小林茂美、桜楓社、二二五～六頁参照）

■国歌大観所収『後撰和歌集』には、こう記されている。

いそのかみといふ寺に詣でて、日の暮れにければ、夜明けてまかり帰らむとて、とどまりて、此寺に遍昭侍りけると人の告げ侍りければ、物いひ心みむとていひ侍りける

小野小町

岩の上に旅寝をすればいと寒し
苔の衣を我にかさなむ

遍昭

かへし

世をそむく苔の衣はただ一重
貸さねば疎しいざ二人ねむ

■流布本系（群書類従本）『小町集』の詞書も『後撰和歌集』とほぼ同じである。ただし神宮文庫蔵『小野小町集』では、相手が「そせい法師」（遍昭の子、素性法師）、その歌の第一句は「よをさむみ」となっている。

■『大和物語』第一六八段や、その影響を受けてとのったと見られている現存の『遍昭集』では、良岑宗貞少将の色好み・出家・諸国修業・寺院での夫婦の邂逅（思いがけなく出会うこと）その他の内容をふくむ長い物語のなかに、小町と遍昭との贈答譚が入っている。

『大和物語』第一六八段中の該当部分を掲げておくことにしよう。――もしかしたら、小町が宮中に上った後の話なのかも知れない。

小野の小町といふ人、正月に清水にまうでにけり。行ひなどして聞くに、あやしう尊き法師のこゑにて読経し陀

羅尼よむ。この小野の小町あやしがりて、つれなき様にて（何気ないふりをして）人を遣りて見せければ、「蓑一つを着たる法師の、腰に火打笥（火打石やほくちを入れる小箱）など結ひつけたるなむ、隅にゐたる」といひけり。かくてなをきくに、聲いと尊くめでたうきこゆれば、ただなる人にはよにあらじ、もし少将大徳（遍昭のこと）にやあらむとおもひにけり。「いかがいふ」とて、小町が「この御寺になむ侍る。いと寒きに御衣一つ貸し給へ」とて、

いはのうへに旅寝をすればいと寒し
苔の衣をわれにかさなむ

といひやりたりけるかへりごとに、

よをそむく苔の衣はただ一重
かさねばつらしいざ二人ねむ

といひたるに、小町は さらに（いよいよたしかに）、少将（遍昭）なりけりとおもひて、ただにも語らひし中なれば（かつて親しく話を交わした間柄なのだから）、あひて物もいはんと思ひていきければ、かい消つやうに失せにけり。……恐らくその後のことであろう 一寺（長谷寺か）求めさすれど、さらにげて失せにけり。かくて失せにける大徳なむ僧正までなりて、花山といふ御寺（京都市山科区北花山町の花山寺。別名、元慶寺。遍昭の創建にかかる「広辞苑」）にすみたまひける。云々。

とある。

小町は、

〈清水寺の隅に居るというその法師は遍昭だろう〉

と思いつつも、はっきり確認する為、あの「いはのうへに……」の歌を送ったように解される。

はたして、その返歌には「よをそむく……」とあった。

しかし、遍昭にとって、いま小町と会って話をするのは〈つらい〉ことだったのであろう。

遍昭は、かき消すように失せてしまったのだった。（後述）

■『遍昭集』は、『大和物語』と大同小異だが、初瀬寺（長谷寺）での出来事とする点が違っている。（後述）

＊

それにしても、幼い小町が作った歌は、遍昭・篁・良実らを驚かせるのに充分なものであった。

石上という所で、旅の一夜を明かそうという折に、

岩の上に旅寝をすればいと寒し
苔の衣を我にかさなむ

と歌ったのである。

なお参考迄に記せば、『小倉百人一首』で有名な、

やすらはで寝なましものを小夜ふけて
　かたぶくまでの月を見しかな

の歌は、赤染衛門〔一条天皇の中宮彰子（藤原道長の娘）に紫式部と共に仕えた女性〕が十三・四歳のころ、姉に代わって詠んだものらしいという。（「宮廷を彩る才女」暁教育図書㈱、七三頁参照）

歌才のある者は、十代前半で後世に残るような歌を作るものなのかも知れない。

＊

日が暮れてゆく。

幼い小町との贈答歌の出来ばえは満足のいくものだった。すっかり気をよくした遍昭は、――ここに、石上寺の近くの母の家へと篁らを案内していったことだろうか。

遍昭の母親は、上品この上もないあたたかい笑顔で、客人らを迎え入れてくれた。

質素ながらも夕餉のだんらんは楽しくうちとけて、話もはずみ、笑い声が尽きなかった。

やがて遍昭が、こんなことを言い出した。

「母は、仁明天皇の第三皇子時康親王の乳母だったのですよ」

篁は言った。

「うむ、あの皇子は、本当に学問のお好きな方でいらっしゃる」

「その時康親王が、昨年の秋、布留の滝を見においでになって、この母の家をお訪ね下さったのでした」

「そうなんですよ。お小さかった皇子が御立派になって私を訪ねて下さいましてね。嬉しくて嬉しくて、泣きたくなるほどでございました」

遍昭の母親はそういって、あれこれと一部始終を語った。その語り口は滋愛に満ちており、目もとには優しさがあふれていた。

小町は、……遠い田舎に残してきた乳母のことを思い出していた。

そしていつしか小町は、やさしい乳母の胸に抱かれているようなやすらかさを覚えながら、深い眠りにおちていった。

乳母

次の日の朝篁らは、遍昭の母親に厚く礼を述べ、別れを惜んで、帰途についたのだろう。

篁・良実・小町らの一行は、舟で布留川・泊瀬川を下り、

牛車で大和川沿いに難波へ出たのち、……淀川の流れを溯って帰京する予定だったのかも知れない。

大和守小野良実の任地であった大和国は美しかった。西方正面に立田山（龍田山）があり、その上に白雲が立ち昇っていて泊瀬川の川面にそれが映っていた。

その時、誰かが歌い出した。

海の底奥津白浪立田山
何時か越えなむ妹があたり見む

（万巻一―八三）

〔立田山を何時越えるのであろうか。早く妻の家のあたりを見たいものだ〕

なお、「海の底奥津白浪」は、立つ・立田山を導く序（序詞）である。（「萬葉集事典」佐佐木信綱、平凡社、九五頁。「萬葉集」㈠日本古典文学大系、岩波書店、万巻一―八三の注参照）

そして、

風吹けば沖つ白浪たつた山
夜半にや君がひとりこゆらん

などとも歌われている。（「伊勢物語」二三段。「大和物語」一四九段。「古今集」巻十八―九九四参照）

■因みに述べると、『万葉集』の次の歌に「立田山」（龍田山・多都多夜麻・多都多山・多都多能山・裁田之山）が詠みこまれている。

万巻一―八三。五―八七七。六―九七一。七―一一八一。九―一七四七。九―一七四九。十―二一九四。十―二三一一。十―二三一四。十―二三九四。十五―三七二三。十七―三九三一。二十―四三九五。

■大和国の『立田山』（龍田山）については、現在、次のように解説されている。

「大和國生駒郡三郷村の西なる嶺。信貴山（四三七㍍）の南に接し、河内國中河内郡堅上村に跨る。いわゆる亀瀬越の山嶺なり。是を『暗峠』（大和國生駒郡南生駒村から河内國枚岡に越える山路）のこととするは誤れる事、上田秋成之を弁ぜり」

という。（「帝国地名辞典」太田爲三郎、名著出版〈龍田山〉〈暗峠〉参照）

■もっとも、信貴山の南麓一帯に、特に目立つ山は見当らない。また、五万分の一地図等の地図を見ても『立田山』（龍田山）の記載が無い。

●つまり、古来数多くの歌に詠まれてきたというのに、その名高い山『立田山』（龍田山）がどの山のことなのか、現在では明確でないようである。

右頁の右側
上・下段にわたって、大きくはみ出して掲載下さい。

カット 69

5.4.1P 2/2

下をカットしないで下さい。

68

140G 写真図版 796 信貴山(437m)およびその南麓一帯

132G

『奈良県の山』(28) 小島誠孝 山と渓谷社 2002年3月1日(改訂第2版)発行 『13頁参照』

120G

・左側に尾根の隆起部 および 朝護孫子寺(信貴山縁起絵巻を所蔵)が見える。

・手前側の起伏のとぼしい山麓あたりを『立田山』と呼んだとは考えにくそうである。